

世間解

第三七一号

平成三十一年 一月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

―ただ、それだけなのであります―

新しい年を迎えました。平成三十一年。みなさま方にはご本願のおはたらきの中お念仏ご相続のこととお思います。昨年中は大変お世話になりました。誠にありがとうございます。縁の中では何がやってくるか分からない日暮らしてあります。が、本年も何卒よろしくお願い申し上げます。

昨年の大晦日にはたくさんの方が鐘をつきにきてくださいました。響いた鐘の音が二〇三回だったそうです。そして百人を超える方がご本堂にお上がりくださり修正会のお勤めにお会いくださいました。

「お正信偈」さまのお勤めの間に皆さまに阿弥陀さまの前までお進みいただきお焼香をしていただきました。小さな子たちがお父さんやお母さんをチラチラ見ながら見よう見まねでお焼香をする様子はほほえましくありがたい相でした。今年も長く頭をさげて礼拝をされた方が多くおられたような気がいたしました。

「あかんがな」とお叱りをうけるかもしれませんが、正直に申しあげます。「何か願い事をされているのかなあ、去年は色んな事があつたからなあ…」などと思いつきながらお勤めをさせていただいておつたのであります。そんなこともあり、ご法話のお取り次ぎでは、

『皆さま、色々な思いを持ってお焼香をしてくださいましたこと、何かを一生懸命願ってお焼香をしてくださった方もおられるかもしれません。』

どうぞお焼香のその一瞬だけでなく、今年一年その願いを持ち続けていただきましたと思います。そしてその願いを持って私を途切れることなく願い支え続けてくださっているおはたらきがあることを知っていただきたいと思います。『というように事をお聞きいただいたのであります。そしてこれはお取り次ぎでは申しあげることにはなかつたのですが、お勤めをさせていただいて続いて若院・徳行の

「…聖人（親鸞）一流の御勸化のおもむきは、信心をもつて本とせられ候ふ。そのゆゑは、もろもろの雑行をなげすめて、一心に弥陀に帰命すれば、不可思議の願力として、仏のかたより往生は治定せしめたまふ。…」

「ただ、それだけのことやねんなあ」と味わわせていただいたのであります。

「我々は阿弥陀さまのご本願のお心をあれこれこねくり回しすぎと違うか」と思つたのであります。蓮如上人は、

「親鸞聖人がお教えくださった阿弥陀さまの救いとは、ご本願のお心を、素直にお聞かせいただく、ということが肝要である。それは阿弥陀さまの「必ず覚りの身にしてみせるぞ、お念仏を称えながら生きてこい」というご本願のお言葉をそのまま聞き受けるところに阿弥陀さまのご本願のおはたらきによって、お浄土に生まれさせていただくくやなあ、という安心が恵まれ「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」というお念仏をご相続させていただく身にお育てをいただくのである。私が何かを理解してそのような身になるのではない。阿弥陀さまのご本願のおはたらきが私をそのようにお育てくださっているのである。私の「いのち」の意味と方向は阿弥陀さまのご本願によってハッキリと定められているのである。」

とおっしゃってくださいるのであります。私の「いのち」の意味と方向について、

「ああだろうか…」<「こうだろうか…」<「こんないただき方でいいんだらうか…」<「どうも得心がいかな…」<「難しい…」<「こんな事では…」

というような私の心と相談するはからいはイランのであります。

「必ず救う、お念仏を称え聞きながら生きさせてこい」という阿弥陀さまのご本願のお言葉とおはたらきをこねくり回すことなく、なんまんだぶ、なんまんだぶ…、という私のお念仏の響きの中に味わわせていただきながら色んな事にあい、色んな思いを持ってゆかねばならない日暮らしを送らせていただくのであります。

「色んな事あるけど必ず支えてるからお念仏称え聞きながら生きてくるんやで、なんまんだぶ、なんまんだぶ…」ただ、それだけなのであります。合掌

世間解

第三七二号

平成三十一年 二月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

—ご法事のこと—

二月であります。今月の「月刊こなつちゃん」で坊守が二年忌の事を書いてくれています。あらためて見せてもらっていますと「あっ、こんな事があつたんか」「へえ、もうそんなにたつのか」「確かにあつたなあ」「などと色々な感慨を覚えます。先月、一月十七日は阪神淡路大震災から丸二十四年の日でした。今年は前坊守・星野親子の往生から丸六年、七回忌の年にあたります。あつという間のような気がいたします。阪神淡路大震災は二十五回忌の年となります。浄土真宗の「ご法事は縁や意味合いについてはあらためてお聞かせをいただきました」と思います。

さて、ご法事のご縁ですが、丸六年で七回忌、二十四年で二十五回忌?と思われたことはないでしょうか。典型的なのはお別れをして丸二年で三回忌。「まだ二年しかたつてないのに何で三回忌やろう」「ご法事は一年前にするんですか?」「数え年でですか?」などなど色んなお声をお聞きいたします。今月はあらためて年回法要の数え方をお聞かせいたしたいと思います。前坊守を例にとつてお聞かせをいただきます。こういう事でありませぬ。

皆さまにお世話になりました。前坊守は行年(数え年)九十一才で臨終を迎えました。平成二十五年二月八日でありました。夕方近くだったのでしようか、それから後々の段取りをつけまして、九日にお通夜、十日にご葬儀、斎場からお骨になって寺に戻つてお勤め、一応の葬儀式の形がすんで坊守や子どもたちと一息ついたのは午後七時頃だったでしょうか。二月の十四日から一週間ごとに七日七日のお勤めで満中陰が済むと四月が目の前ということになっていました。

その後、「ああ、今日は八日か、ばあさんの命日やったなあ」というような調子で毎日の日暮らしの中を過ごします。それでも秋から冬になりますと「一周忌や

なあ、ご親戚の皆さんにお知らせせんとなあ」とご法事の準備に取りかかります。平成二十六年の二月が来て「一周忌」これは「一年たったなあ、一周忌やなあ」となんとなくイメージ出来ます。で、それから春のお彼岸や、永代経さまや、お盆や、秋のお彼岸や、報恩講さまや、といいながら日を越して、大晦日、たくさんの方に鐘をつきにきていただいております。日々の暮らしにかまけて「いうてる間にばあさんのご法事やなあ」ということになって三回忌であります。実際は父の二十五回忌と一緒に勤めをさせていただきましたので、二月ではなかったのですが、厳密には平成二十七年の二月八日が前坊守の三回忌であります。アツというまでありました、平成二十五年からはまる二年しかたつていません。実際はご葬儀から満中陰で一区切りということがありますので、感覚としては丸二年もありません。そこで「三回忌」それから丸六年で七回忌であります。

「何で?」ということになります、これはちゃんと理屈になつておるのであります。「何回忌」とも申しませぬ。「忌」には、かしこまる、という意味があります。前坊守の命日は平成二十五年の二月八日でありました。これが、命日、つまり忌日であります。年に一度しかありません。一年たつて二月八日が巡つてまいります。平成二十六年であります。

季節が一巡りいたしましたので、「一周忌」とも申しませぬ、命日としては二回目であります。ですから「一周忌」は言い方を変えますと「二回忌」なのであります。で、次の年、平成二十七年は三回目の命日であるというので、時は二年しかたつてないけど「三回忌」ということになるのであります。つまり「何回忌」というのは「何回目のご命日」という意味であります。

「わあ、もう七回忌かはやいなあ」と日暮らしに追われ日々疎い私でありませぬ、私の日暮らしのどの「瞬間をとつても阿弥陀さまのご本願のおはたらきは、阿弥陀さまと共にあるご往生、生かされた方々の願いとはたらきは途切れることなく私を支え続けてくださつておったのであります。

「そやからお念仏出来てんねんなあ」「ご法事は先立たれた方を偲ぶ自身の日の越し方を振り返るご法縁なのであります。

世間解

第三七三号

平成三十一年 三月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

―浅きは深きなり―

弥生三月であります。だんだんと暖かくかかってまいりまして季節が進んでいる

ことを感じる頃であります。皆さまにはご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏ご相続のことと思ひます。

「又云、念佛はやうなきをもてなり。」

これは法然聖人のお言葉であります。

またハッキリと確定は出来ませんが、

「浄土宗安心起行の事、義なきを義とし、様なきを様とす、浅きは深きなり」というお言葉が法然聖人のお言葉として伝えられています。

先の「又云、念佛はやうなきをもてなり。」とあわせると法然聖人のおっしゃり
そんなお言葉といえましよう。

これはお念仏を称えるということがどういふ事なのかをお教えくださるお言葉
であります。

お念仏を称えさせていたただくから「一回より十回の方がいいだろう…」
立って称えるより座って称えた方がいいだろう…” “今称えるより後で称えた方
がいいだろう…” “ちゃんと意味を分かって称えなければいけないだろう…”

“ボンヤリ称えるようハッキリ称えた方がいいだろう…” “家で称えるよりお寺
で称えた方がいいだろう…”

こんなふうには私達は色々な事を思うものであります。

今、法然聖人が「様なきを様とす」とおっしゃってください。

これはへお念仏をご相続させていたただくについて特別な称え様はないんだよと
おっしゃるのであります。

つまりへお念仏させていたただくそれだけなのであります。

どうしたらお念仏出来るようになりますか？とお尋ねいただくことがあります。

試しに、小さな声で結構です。次の一行をゆっくりと声に出して読んでみてく
ださい…、

なんまんだぶ。なんまんだぶ。なんまんだぶ。なんまんだぶ。

はい、もう四回お念仏をご相続くださいました。お念仏はそれを称えてそこから
引き替えに阿弥陀さまのおはたらきが来てくださるではありません。

阿弥陀さまの「お前さんかならず覚りの身にしてみせるから、お念仏申しながら
大切に生ききつてくるんやで」というご本願のおはたらきがへ何時でもへ何処
でもへどんな状 況や思いの私をもく一瞬も途切れることなく包みきつて支え
続けてくださっている阿弥陀さまのご本願のおはたらきのあらわれなのであ
ります。

私が「何時」「何処で」「どんな相で」「どんな思いの中で」「なんまんだぶ」
とお念仏称えさせていたただいても、また私の耳におへなもあみだぶつが届いて
も、それは全部、阿弥陀さまの「お前さん必ず支えてるよ」というご本願のおは
たらきのあらわれなのであります。

お念仏の称え方や、称え振りや、回数に一切の心配を付け足さない。

一声、一声のご自身のお念仏さまに一声、一声「ああ、支えてくださってんねん
なあ」とお聞かせをいたただくのであります。

それが「様なきを様とす」へお念仏の称え様には特別な称え様がないんだよと
いう法然聖人のおさとしであります。そして、私の口から出てくださる「なもあ
みだぶつ」というお念仏は、私が称えているには違いない、そして、「私が称え

るお念仏」とおもっている、その意味ではたいしたことのないものと思う「なも
あみだぶつ」には阿弥陀さまの「お前を必ず覚りの身にしてみせる」という、
へ深い深い尊いお心がこもってくださっているんだよ」というのが

「浅きは深きなり」というお味わいなのであります。

世間解

第三七四号

平成三十一年 四月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

―平成のおわりに―

四月であります。平成という元号の最後の月であります。

私は昭和三十六年の生まれで昭和が終わった時は二十八才でありました。それから三十年、平成が過ぎようとしています。

改めて振り返りますと、この『世間解』を綴り始めましたのが（昭和六十一年の十月）でした。第一号の最初は、

“本年も無事に報恩講を迎える事ができ大変有難く思います。ご承知のように報恩講と申しますのは、「親鸞聖人の恩徳を報ずる」為に行う真宗の寺院に

とっては一年の内でも最も大切な行事であります。

そこで、本号より、釈尊によって明かされ、インド、中国、日本の高僧方から親鸞聖人に受け継がれた浄土真宗、更には仏教と言う教えについて色々なことを身近な所から皆様方と一緒に考えて行ければと思いい小紙を発行させて頂くことにしました。少しずつでも皆様方の聞法のお役に立てて頂ければ有り難いことであると思っております。

そこで、まず始めに

「浄土真宗の教章」について順に見て行きたいと思っております。…」

と、こんな言葉から始めています。何とも堅い文章です…。

しかし、父も母もまだ元気でおりましたし、結婚をさせていたたくちようど一年前で、覚えていませんが：「何かやろう」と考えていたのだと思っております。当初は三十部くらいをコピーして十三日の定例法要でお配りをしていました。しばらくしてから毎月のお参りでお配りをするようになりました。

一、二年の間は表面だけで、今のうちに裏に法座の案内等を刷ることはしていませんでした。また、タイトルも毎号大きな文字で書いていました。

今のように（念仏もうさるべし）と掲げるようになったのは、平成二十年の一月、第二三九号からでした。これもすっかり忘れてしまっていますが、そのころから親鸞聖人が仰がれた阿彌陀さまの救いのおはたらきは「念仏もうさるべし」という一言にに撰まるんでないかと味わいだしたのだと思っております。平成二十年というなにかの節目も（今年からはずっとこのタイトルで行こう）とする

キツカケになったのかもしれない。

私が称え、私に届いている「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」というお念仏がどういう意味を持ちどういう徳を私に与えてくださっているのか、

浄土真宗を聞くということはその一点に尽きるといって過言ではない。

“阿彌陀さまは（なまもあみだぶつ）という言葉の響きとなって私を包んでくださっている”というお育てに遇わせていただいたんやなあと今は味わっております。

六年前からは坊守さんが『月刊こなつちゃん』を通して日暮らしの中の思いや？（ハテナ）の中からお念仏に、ご法義にふれるご縁を作ってくれています。

若坊守の美緒ちゃんもコーナーを持ってくださることもありうれしいことです。

「毎月、毎月こんな書きはんの大変でしょ」とおっしゃっていただくことがあります。そんな時もあります。しかしそのおかげで、改めて和上や先生方からお聞かせをいただいた事を思いだし、反芻し味わわせていただく尊いご縁になっていくことは間違いないのであります。

阿彌陀さまのご本願のおはたらきは、決して変わることもなく私を願いつつ支え続け、育て続けてくださっておりますのであります。そのおはたらきが私に「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏をさせてくださっておりますのであります。

そのおはたらきの中で、『世間解』も『月刊こなつちゃん』も続くことが出来るのであります。

何かが分かってから、何かが出来てから…、お念仏をるのではありません。

お念仏を一生懸命唱えて阿彌陀さまのお救いにあずかるのでもありません。

日暮らしの一声、一声のお念仏が“お前さん、必ず支えてんねん”とおっしゃってくださっている阿彌陀さまがご往生くださった方々が私を支え続けてくださっている何よりの証しなのであります。念仏もうさるべしであります。合掌

世間解

第三七五号

令和元年五月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

― 変わることをない願ひ ―

五月であります。木々の緑の美しい季節です。皆さまにはご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。

何時も親鸞聖人が仰がれた阿弥陀さまのご本願のお念仏のことをお聞かせをいただいておるのであります。

“念仏”と聞くと今は「ああ、なもあみだぶつ」と称えることやな」というふうにも多くの方がお考えくださると思ひます。

しかし、本来仏教においては“念仏”の念とは厳密には、明記不忘、という意味で、へ明らかにハッキリと記憶して決して忘れない、ということだそうであり、念仏とは我々の場合はへ阿弥陀さまのごことでもありますから、本来のお念仏とはへ阿弥陀さまのお徳やお相をしつかりと念いながら、なもあみだぶつと称える、ということになるのであります。

そこにはボーツと称えるのではなくしつかりと仏さまのことを念いながら、一回よりは十回、十回よりは百回、百回よりは…と称える心もちや、称える回数が大きな意味を持って考えられました。お同行さま方は如何でしょうか？自分のことはよく分かりますので、申しあげますが、

ご本堂で阿弥陀さまの前に座らせていただき「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏をご相続させていただく。お同行さまのお家に寄せていただいてお仏壇の阿弥陀さまの前で「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏をご相続させていただきます。正直に申しあげますと、私自身「お前さん何時でもへああ、阿弥陀さま有り難いなあ」と阿弥陀さまのお徳を念いながらお念仏をご相続させていただいているか？」と聞かれたら「ハイ、そうです」はいえませんが、朝のお勤めの時もお経さまを誦読させていただきながら、心の中では

今日は、あそこあそこのお家に先ずお参りさせていだいて郵便局で切手買って、そこからあのお家やな…などとお勤めさせていただきながら一日の段取りを考えながらいる…という事があつたりします。

もしも、浄土真宗の“お念仏”がへ阿弥陀さまのお徳やお相をしつかりと念いながら、なもあみだぶつ、と称える、そうでなければならぬ！ということであれば完全に私は失格であります。

そういう形で考えられていた“お念仏”の意味を、阿弥陀さまのご本願の心を中心として本当のお念仏の意味を明らかにして下さったのが法然聖人でありました。

「お念仏は私がしつかり唱えてその引き替えに阿弥陀さまのお救いが来るのではない、阿弥陀さまがこれを称えながら生きてこい。必ず覚りの身にしてみせる」と阿弥陀さまの方から私に届いて下さっている尊い行である。とお示し下さり、それをハッキリと承けお教えくださったのが親鸞聖人でありました。

阿弥陀さまのご本願は「お前さん、どんな事があつても必ず覚りの身になることが出来ると思つてたとえ十遍でもお念仏称える者を若し浄土に生まれさせることが出来なければ私は阿弥陀仏にはならない」というものでした。

そこには、“これだけの修行をして称えよ”とも“これを分かつてから称えよ”とも“これだけの数を称えよ”ともおっしゃっておられないのであります。

“お念仏してくれよ”とおっしゃるのであります。本当にタダそれだけなのであります。阿弥陀さまの願ひは私に“お念仏してくれよ”とは引き続き続けてくださつておるのであります。

たとえ何が変わろうともこの阿弥陀さまの“願ひ”と“おはたらき”は決して変わることはないであります。

浄土真宗の“お念仏”は私がしつかりと阿弥陀さまやご往生くださった方のことを念ひ続けなければならぬというものではありませんでした。先立たれた方を念つて大切に称えるお念仏も、そうでないお念仏も、阿弥陀さまやご往生くださった方々が途切れることなく私を思い続けてくださつておはたらきのあらわれであつたなあと安心させていただいたのであります。

世間解

第三七六号

令和元年六月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

― 育ててくださる ―

六月になりました。皆さまにはご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏ご相続のとおもいます。

先月、法然聖人が見極めてくださり親鸞聖人が受け伝えてくださった、阿弥陀さまのご本願のお念仏の心”をお聞かせをいただいたのであります。

しかればたれだれも、煩惱のうすくきおもかへりみず、罪障のかるきおもきおもさたせず、ただくちにて南無阿弥陀仏となえば、こえにつきて

決定往生のおもひをなすべし、決定心をすなわち深心となづく。その信心を具しぬれば、決定して往生する也。詮ずるところは、ただともかく

にも、念仏して往生すといふ事をうたがはぬを、深心とはなづけて候なり。法然聖人のお言葉であります。

『どのような人であっても、欲や瞋恚の煩惱が激しいとか、それほど強くないとかいう事にとらわれて善し悪しを気にする。また罪が深いとか浅いとかを問題としてこれで救われるとか、こんな事では救われない等と自分の心と相談をする

ではなく。唯、口に“なもあみだぶつ、なもあみだぶつ”とお念仏をご相続し、そこに聞こえてくださる“南無阿弥陀仏”の一声一声に“ああ、阿弥陀さまが

途切れることなく私を願い続け支え続けてくださっているおはたらきのあらわれだなあ”と安心をさせていたくださるのですよ。この心を本當の信心というのです。

この心をお育てくださっているおはたらきが私をお浄土に生まれさせてくださるおはたらきなのです。私がいただいている阿弥陀さまのお救いのおはたらきは、

“これで大丈夫だ”とか“こんな事ではどうしよう”などと自分の心と相談したり、自分の行いや思いを取り繕うのではなく“なもあみだぶつ、なもあみだぶつ

…”とお念仏をご相続し“こうしてお念仏出来ているということが間違いない

阿弥陀さまの救いのはたらきの中に生かされていることなんだなあ”と安心させていただく。これが本當の信心ということですよ。』

とお念仏をご相続いただくことでもあります。浄土真宗の、親鸞聖人がお味わいください、お説き残しくださった阿弥陀さまのご本願の救いはその一言に尽きるのであります。

「なもあみだぶつ」というお念仏さまは「私の日暮らしがうまいこと行くための魔除けのおまじない」でも「何かよいことがやってくるというマヤカシの呪文」でも「タダの気なぐさみ」でもありません。

阿弥陀さまの“お前さんどんな事があっても必ず覚りの身としてみせるぞ”という真実の智慧とお慈悲のこもった“阿弥陀さまのお徳とおはたらきのすべて”なのであります。

昭和五十九年の五月頃であったとおもいます。梯實圓和尚が信教校に入学したての我々に「まあ、色んな事をいう人があるだろうけど…」と前置きをされて「とにかくお念仏する事だな」とハッキリとおっしゃいました。

その時の私は「色んな事をいう人」の意味が分かりませんでした。お育てをいただいた今は、そんなお念仏は本當のお念仏ではない、自力のお念仏である、などという方のことを指しておられたことが分かります。和尚のお言葉をもう少し

分かりやすく申しあげれば、「まあ、そんな心でお念仏したって駄目だよ」とか言ってくる人があるかもしれないけど、そんな事にせずとにかく「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏させていただくことです。」というお言葉であります。そしてそのあと梯和尚は「君たちがご相続しているお念仏が君たちを

育ててくださるんだ」とお教えくださったのであります。私が何時どんな処で、どんな思いで“なんまんだぶ”とお念仏を称えても、またお念仏さまが聞こえてくださってもそれはすべて阿弥陀さまのそしてご往生くださった方々の“必ず支えているよ”というおはたらきのあらわれだからであり

ましよう。私がご相続しているお念仏が私を支え。私の心をお育てくださる阿弥陀さまのお喚び声なのであります。

世間解

第三七七号

令和元年七月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

ーごちやごちやいわずにー

七月になりました。有縁皆さまにはご本願のおはたらきの中お念仏ご相続のこ
とと存じます。いよいよ暑さに向かいます。熱中症予防のためこまめに水分を
取るなどお身体くれぐれもお気をつけください。

さて、関東では今月、関西では来月になるとお盆の行事が各地でお勤まりにな
ります。仏教が大切に守り通してきたお仏事であります。

ここ数年この時期になると山本攝叡先生にお聞きした、
「盆は嬉しや 別れた人も 晴れてこの世に あいに来る」
という山本仏骨和上が八月になると必ずご自坊の山門横の掲示板に書いて貼って
おられたというお歌を思い出します。

昨年もお盆の時期にお聞かせいただいたことですが、浄土真宗では先立たれた
方を“ご往生”くださった方とおおぎます。それは、私が何かお弔いをさせて
いただく方、ではなくて、阿弥陀さまと一緒に何時でも何処でも私を支え続け
くださっている方、といただくのであります。その通りなのですが、
その上で、先立たれた方を何処までも何処までも懐かしく思い出します。

「臨終の時はいくつやったなあ…」 「こんなん言うてたなあ…」 「あんなことし
てたなあ…」 「あの食べもん好きやったなあ…」 「今おつたら何歳やなあ…」
先立たれた方を偲ぶ感慨はいくつもありました。

浄土真宗の教えはこうで、浄土真宗ではこんなことは言いません、
浄土真宗ではこんなことやりません、とかそんなことゴチャゴチャ言わんで、
「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」というお念仏とともに

「盆は嬉しや 別れた人も 晴れてこの世に あいに来る」
浄土真宗はこれでエエねんやろなとこの頃は思うのであります。

しかし、何でもかんでも私の思いのままということではありません。

テレビなどでお仏事の話になると「最後は自分の心の持ちようですね」とい
う方で納めてしまうことがあります。私の心が一番手に負えないんだよ
というのを教えてくれるのが仏教であり、その教えに従って生きてゆこうとす
るのが仏教徒であります。阿弥陀さまの願いに会い、阿弥陀さまの願いを聞いて
ゆく仏道としての浄土真宗であります。

私が歩む仏道それがお念仏であります。五月の定例にご出講くださった
牧野法生先生のお父さまの「何もなくてもいいから最後はお念仏バイ」というお
言葉は私の日暮らし、日の越し方の要をお教えくださったっているお言葉でありま
し。コテコテと理屈を言うのではないのであります。

私が私の能力で理解した理屈の中で「浄土真宗はこうである！」などと
気張る必要はないのであります。“私のやることなすことせうんぶ阿弥陀さまは
お見通しで、その上で色んなことに遭い色んな思いを持ってゆかねばならない
私を何時でも何処でも離れることなく願い支え続けておってください” そう
安心させていただくだけであります。

そして阿弥陀さまのご照覧の下に日暮らしをさせていただき、そこに先立つて
くださった、ご往生くださった方々の私を支え続けてくださっているおはたらき
を味わってゆく、それだけであります。

お盆に“晴れてこの世に あいに来てくださる”方々と阿弥陀さまの願いは
“あなた、必ず支えているからお念仏申しながら大切に生きさせてくれよ”とい
うものであります。

その願いを聞かせていただく、その願いの通りにならせていただくのであります。
“お念仏申してくれよ” “ハイ”というのは聞いたことではありません。
“お念仏申してくれよ” “なんまんだぶ、なんまんだぶ…”これが、阿弥陀さま
の、ご往生くださった方々の“願い”を聞き願いの通りに日暮らしさせていた
いでいる相であります。

ほんまは何時でも一緒に居ってくださいってんねんけど、“お盆の頃は改めて深く
懐かしく先立たれた方々を偲ばせていただく”それでエエンでないですか。合掌

世間解

第三七八号

令和元年八月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

―なにがどうかわっても―

「ご本願のおはたらき中「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏をご相続のことと存じます。八月であります。暑さの厳しい日が続くことと思ひます。ここ数年、屋外よりも屋内で熱中症にかかる方が多いそうです。決して無理や我慢をせず冷房をつけて水分を充分にとつてお過ごし下さいと思ひます。有縁みなさまにはお身体くれぐれもお大切になさってくださいませ。さて、突然ですが「三十八」ありました。「三十八」と聞かれて何か思われることはあるでしょうか？いきなり何のこっちゃ？てなものでしょうか、

実はこの三十八というのは親鸞聖人がお生まれになった承安三年から「往生」になられた弘長二年までの九十年の「生涯の間」にあった元号の数です。実際は源平の合戦の中で源頼朝方が別の元号を使うということがあったりしますので、同時に二つの元号が存在する時期があるのですが、それを入れて全部見ますと、三十八数えることが出来ました。

ごく単純に計算すると二十九ヶ月に一度、おおよそ二年半に一度の割合で元号が変わったことになりました。

当時はいろんな奇瑞があったり反対に大災害や飢饉、疫病、天変地異などがあると今の元号をやめて新しい元号にすることによってそれを克服しようとした。逆にいえばとても困った時には、元号を変えて加持祈禱をすることくらいしか出来ることがなかった…、ということも分かりません。

そこには「こういう元号に変えた、これで何とかしよう」とか、あるいは「素晴らしいことがあった。元号も目出度いモノにした。もっと素晴らしいことがあるように」というようになにがしかの「願い」がそこもついていたと考える

ことが出来ます。

我々は折々に色々な「願い」を持ちます。それはその時の状況、況や自分の心のありかたによってコロコロと変わってゆきます。

梯實圓和尚がある時、

『：以前に八尾の方にお説教に寄せていただいたことがあって、駅から歩いてましたら道の端にお地藏さんがあってね、そこに「願地藏」と書いてありました。由来をよんでみると「この地藏はどんな願いでもただ一つだけ、ただ一つだけ、どんな願いでもかなえてくれる」と書いてあるんです。それ読んでね、ただ一つだけか：「ワシやったらどんな願いを持つやろなあとおもて考えながら歩いてましてん。しかしろくな願いは出てきませんなあ：』とおっしゃっていたことがありました。

私の願いは自分の欲や好みを満足させるという思いから出てくるものだからでしょう。

鎌倉時代、いや江戸の頃まで世の中に何か変化があると善し悪しを含めて元号を変え色々な問題に対応しようとした。しかし、元号を変えたからといって病気がなくなったり、飢饉が収まったりすることはありません。

世の中の、私の中の何が変わっても決して変わらないものがあります。

「お前さん必ず支えてるよ、お念仏称えながら大切な「いのち」を生きておくれよ」という「阿弥陀さまのご本願のお言葉とおはたらきであります。」

『：もしかしたら、阿弥陀さんに私の願いを聞いてもらおう、と考えてるんじゃないかな。逆なんですよ、私が阿弥陀さまの願いを聞かせていただくんだ、…』これも梯和上のお言葉です。

私の願いをかなえるために色々なものを使うんじゃない。「私は阿弥陀さまに、ご往生くださった方々に願われているんだ」ということであります。

お盆のご縁に改まってお恩返しをし、お礼を申しあげる方は阿弥陀さまと一緒に何時でも何処でも私を願い続け、支えつけてくださっているお方なのであります。私の願いより先に私は願われているものであったと聞かせていただくのであります。

世間解

第三七九号

令和元年九月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

― 報恩講さま ―

有縁皆さまには阿弥陀さまのご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏ご相続のことと思います。お盆のお参りも皆さまのおかげで無事にお勤めさせていただくことが出来ました。ありがとうございます。九月になりました。

来月は西法寺の“報恩講さま”であります。“報恩講”とは宗祖・親鸞聖人のご命日のお勤めであります。

ご本山・京都の西本願寺では毎年、一月九日から十六日までの七日間お勤まりになります。この最終日、一月十六日が親鸞聖人のご命日であります。

各寺の住職はご本山の報恩講さまにお参りをさせていただくために、その時期をご遠慮して各々のお寺で報恩講さまをお勤めさせていただきます。

本願寺の報恩講さまは正しく親鸞聖人のご命日にお勤まりくださいますので、“御正忌報恩講”と申しあげます。

関西では多くの場合、秋から冬にかけて勤まりますが、時期は色々であっても全国の浄土真宗の寺院で“報恩講”を勤めないところはありませぬ。

お仏事に「大切なお仏事」へ「そうでもないお仏事」などというものはありませぬ。しかし、その大切なお仏事の中でもことに大事をかけてお勤めさせていただ

くのが“報恩講さま”なのであります。ご命日のお勤めでありますから、いわば「ご法事」なのですが、親鸞聖人の「命日のお勤めに限ってはただ「ご法事」といわずに“報恩講”と申しあげるのであります。

親鸞聖人がご往生になられた弘長二年（一二六三）から毎年お祥月の「命日にはご法事がお勤まりになっていました。当初は特別な呼び方はなく

「ご法事」としてお勤めされていたようですが、ご往生になられて三十二年後、つまり三十三回忌の年に曾孫に当たられる本願寺第三代・覚如上人が『報恩講私記』というお書物をお著され親鸞聖人のお徳をお讃えくださいました。それから親鸞聖人のご命日のお勤めを“報恩講”とよばせていただく事になったのであります。

ちなみにこの報恩講というご法要はお師匠さまの法然聖人のご命日のお勤めが“知恩講”とよばれていたことに習われたとお聞きしています。

さて、“報恩講”とは宗祖・親鸞聖人のご命日のお勤めであると聞かせをいただきましたが、「報恩」とは読んで字の如く“ご恩”に“報”お勤めであります。親鸞聖人の“ご恩”に“報”るのであります。

「そんなん、どないしてご恩に報いたらよろしいの？ 難しいて分かりませぬわ」などとおっしゃっていただいていたのではアカンのであります。

行信教長の校長先生でいらした利井明弘先生はおっしゃいました。

『僕ね、この頃思うねん。本當の報恩とは、“いただいたものを素直に慶ばせてもらうということや”とこの頃は思てるんです。』と、

毎年西法寺の“報恩講”には毎年近隣のお寺さまがお参りくださり「一緒にお勤めをくださるのであります。本年はご本堂の東側に「西法寺門信徒会館」を建築中でありますので、残念ながら近隣のお寺さまのお参りはありません。

しかし、梯實圓和上のご子息、大阪大谷大学教授・梯信暁先生がご出講くださりご法話くださいますので、どうぞたくさん皆さまにお参りをいただき、

にぎやかに親鸞聖人のお徳をお偲びし、お礼を申しあげること縁にさせていただきますたいと思ひます。親鸞聖人のおかげで「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお

念仏を称えさせていただくことが、一瞬たりとも途切れることのない阿弥陀さまのご本願のおはたらきの中に生き、阿弥陀さまのご照覧のもと日暮らしさせて

いただいていることだったと味わわせていただく身にならせていただいたのであります。なにも“報恩講さま”の時だけ特別に“ご恩”に“報”のではありませぬ。毎日毎日が報恩の、お念仏の日暮らしでありましようが、その中で改まった形での“報恩講さま”のご縁どうぞ、どうぞご参集くださいませ。合掌

世間解

第三十八号

令和元年十月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

― 今生 一旦 ―

十月であります。今年も日が重なってまいったのであります。有縁皆さまにはご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏ご相続のこ

とと思えます。さる七月二十二日に大阪の都呂須孝文という先生がご往生になられました。そう度々お目にかかることはなかったのですが、大変優しい先生で時々にお目にかかるような私にも親切に色々とお教えをくださりお育てをいただきました。

五月に先生のご自坊でご法話をさせていただくご縁をいただき、そこでお目にかかりお話しをさせていただいたのがお会いした最後になりました。お通夜に若院と共に御参りをさせていただいて、今一旦のお別れのご挨拶をさせていただきますのであります。

先生のご往生の知らせを受けて、色んな事を思い出しながらご生前にお育てをいただいた事へのお礼とお悔やみのメールをご子息にお送りしたのであります。しばらくするとご子息からこんなお返事をおいただきました。

『先生、夜分になりました。ごめんさい。』

お優しい御言葉ありがとうございます。

遺影の写真を探しに父の書齋に参りました。「お父さん」って何故かいつものように呼んでしまいました。当然返事はなく、自分の声の響きに、ああもうお父さんほんまにおらんやんと寂しさがこみ上げてきましたが、この場所をよく本を読みながらお念仏してくださいな。と思ひ出すと、寂しさが一息に和みになりました。

お念仏ってほんとにながってるのですね。でもやっぱり父のご法義が聞けなくなるのは寂しいです。

長々とすみません。』

娑婆に“いのち”をいただいているかぎり“臨終”という別れは決して避けることは出来ません。それは当然のことながら人の“いのち”だけではなく自分の“いのち”もそのとおりであります。

そして、その“臨終”は何時、何処で私の上によってくるかは分かりません。“いのち”の終焉を目の当たりにする私はただ立ち尽くすしか術はありません。しかし、立ち尽くす以外に術のない私に間違いなしに阿弥陀さまのお心が、おはたらきが、お念仏が届いてくださっていると安心させていたでるのであります。阿弥陀さまの救いの法はへ寂しさや悲しさに打ち勝って安心せよ！〜などという恐ろしい教えではありません。

寂しさ悲しさに打ちひしがれるままの私をそのまま“必ず支えているよ、先だった人はすでに私と同じ浄土に往って、私と同じ覚りの身とお生まれくださったよ”という言葉となつて私を抱き取ってくださいとおるのであります。

“往生”今では色んな意味で、色んな場面で使われる日常の言葉になっていますが、阿弥陀さまのご法義の中では大切に大切にまもられてきた仏さまの言葉

〈仏語〉であります。

“往生”ご覧いただく文字の通りであります。“阿弥陀さまのお浄土に往って、阿弥陀さまと同じ覚りの身と生まれさせていただくこと”であります。

先立たれた方をそのように仰ぎ、自らの“いのち”の意味と方向をそのように受け取らせていただくのであります。

「阿弥陀さまのご本願の“必ず救う”というお言葉におまかせするんだ。そんなら死にやすいでえ、ほんでまた人も送りやすいわ」 梯實圓和上はこうおっしゃいました。

“往生”という仏語が避けることの出来ない“臨終の別れ”をただの絶望的な悲しみに終わらせるのではなく、寂しさや悲しさは無くなりはいないけれども今生一旦のお別れとして、そして先だった人が阿弥陀さまと同じおはたらきで私を支えてくださっている方として、そこに尊い意味と安心を与えてくださるのであります。

世間解

第三八一号

令和元年十一月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

― 称える ―

十一月であります。皆さまにはご本願のおはたらきの中、「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏ご相続のことと思えます。

何時も、いつも、繰り返し、くりかえしお聞かせをいただく事ではありますが、「お念仏」をご相続させていただくことであります。

浄土真宗の「法義はご自身で」「なんまんだぶ、なんまんだぶ」とお念仏称えていただくことに尽きるのであります。

お念仏は「称える」のであります。「称 名念仏」ともうすのであります。「称える」のであって「唱える」のではないのであります。

親鸞聖人がお念仏を「となえる事」を意識して書かれる時には「称える」とお書きになるのであります。

お釈迦さまがどれほどすばらしいお方であるかということをお説くお経さまが、あります。お釈迦さまはこの娑婆に生まれてくださるまでに数え切れない功徳を積んでこられたという、お釈迦さまの前生の物語を説くお経さまであります。その中に「シビ王」というものがあります。

『シビ王という大変慈悲深い王様がいました。ある時森の中を歩いていると一羽の鳩が王様の元に飛んできました。見るとケガをしています。鳩は「鷹に追われて逃げてきました。どうぞ救ってください」といいます。

シビ王は「よしわかった」と鳩を懐に入れて歩き出します。直に鷹がやって来て王様に「いま、ここに傷ついた鳩がやって来ただろう、それは私の餌だからだしてくれ」といいます。「いや、鳩に助けてやると約束したから出すわけにはいかない、食べるものなら少し行けば動物の死骸があったからそれを食べればいい」シビ王が答えます。「悲しいことだが生きた血の出る肉でないと私の「いのち」

は継げない。だからその鳩を食べなければ私は死んでしまう。鳩を助けて私を見殺しにするのか。」と鷹が言います。シビ王は「わかった。では私の肉をお前にやろうそれでいいか」と聞きます。「そうか、血の出る肉であれば鳩でなくともいい。」といったあと鷹は「しかしその鳩と同じ重さの肉でなければならぬ。人間は信用出来ないからキツチリと重さを量ってくれ。」といいます。天秤ばかりが登場します。一方に鳩を乗せる。当然そちらが下がります。反対側にシビ王は自分のお尻の肉を削いで乗せますがはかりは全く動きません。足の肉、背中の肉、お腹の肉：次々に乗せていきますが天秤ばかりは鳩の方に傾いたままです。「全身舍利となった」と書いてありますから、骨だけになったシビ王自身ははかりにより登った。するとはかりがスツと動いて水平になった：「こんなお話しであります。

これは物理的な重さを量っているのではないことがわかります。か弱い鳩も、どう猛な鷹も、王様も「いのち」という意味においては全く等しいと言うことを教えてください。そして、このシビ王が後のお釈迦さまであるといった時には「仏さま」の「いのち」も同じ重さであるという事になります。

さて、ここに出てくる「天秤ばかり」ですが、お経さまには「称」という字を書いて「はかり」と読ませています。「秤」という字ではなく「称」なのです。これは誤字ではありません。親鸞聖人がお念仏をとなえる事を「称える」とお書きになる意味がここにあります。『一念多念文意』というお聖教に、

「称」は御なをとなふるとなり。また「称」ははかりといふこころなり。はかりといふはものほどを定むることなり。

とおっしゃっているのはこのことを意識されていると思われまします。

私の「なんまんだぶ、なんまんだぶ」というお念仏さまの「一声一声には阿弥陀さまの「いのち」全体が乗ってくださっているのではありません。

私の口から出て耳に届いてくださる「なんまんだぶ」は「そやなあ、色んなご縁で私はお念仏するようになったなあ」というのではなく、私は「阿弥陀さまの「いのち」全体をかけてくださっているお育てとおはたらきによってお念仏させていただけるようにならせていただいた。」のであります。

世間解

第三八二号

令和元年十二月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

― “いのち” の意味と方向 ―

十二月、歳の暮れであります。有縁皆さまには「本願のおはたらきとともに各々の縁の中で「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。本年も何かとお世話になりました。誠にありがとうございました。

梯 實圓和上が晩年度々おっしゃって「私の“いのち”の意味と方向」ということを思うのであります。今年も色々な事がありました。今も私の知らないところで災害や、病氣、事故、思いがけない事柄で不安の中におられる方もたくさんおられることでしょう。

大きな災害があった時、テレビの前で私は「えらい事やなあ、大変やなあ」とつぶやきます。“なんとかしてあげたい”と思います。しかし正直に申し上げて現実は何をしてさしあげることも出来ません。

それどころかお参りに出たり、他のことをやり始めるとそのことーなんとかしてあげたいーという思いを忘れてしまいます。そして、しばらくしてテレビのニュースでその様子が映るとまた「うわあ、えらい事やなあ、大変やなあ」とつぶやきます。そして“なんとかしてあげたい”と思うのであります。しかし、またすぐにそのことを忘れて他のことを考えたりやったりするのであります。私は何事につけても気持ちが薄まるのだと改めて気づかせていただいたのであります。災害や被災された状況を見て“出来るだけのことはさせていたただこう”と強く思います。しかし実際は現地に飛んでゆくわけでもなく、せめて義援金を…というところで止まってしまうのであります。自身の無力さを感じることであります。出来ることと出来ないことがハッキリと知らされます。

もう一つあります。例えば災害の状況を見てテレビで見る。“大変だなあ”とは思わぬ。思うけれどもその思いはズーッと続かない。その理由の一つはそこに自分

の身内や近しい人がいないからであります。私の思いはその相手によって強い弱があります。この一年、楽しいことやうれしいことも多くありました。そして、さまざまな災害や事件事故のニュースに触れた一年の中で歳の暮れにそんなことを感じているのであります。阿弥陀さまのご本願のおはたらきは全く違うのであります。『仏説無量寿経』というお経さまに、

もろもろの庶類のために不請の友となる。群生を荷負してこれを重担とす。不請の法をもつてもろもろの黎庶に施すこと、純孝の子の父母を愛敬するがごとし。もろもろの衆生において視そなはずこと、自己のごとし。

というお言葉があります。“不請の友となつて不請の法を説く”これが阿弥陀さまのおはたらきでありお相でありました。こちらか何もお願いしないのに、阿弥陀さまの方から近づいて私の心の支えとなり、真実の教えを聞かせることによって私に本当の“いのち”の意味と方向を知らせ正しい生き方を示してください。そういうおはたらきあらわれが“なもあみだぶつ”というお念仏だったのであります。そのおはたらきの徳は相手によって強い弱がありました。かかる思いが濃くなったり薄くなったりすることはないのであります。

私がやがてお浄土に生まれさせていたただくということはそういうおはたらきをさせていただく身にならせていただくことでもあります。娑婆では出来ることと出来ない事があったり、相手によって態度が変わったりしてしまいますが、そういうこと無くあらゆる場所のあらゆる“いのち”を尊いものとして願ひ続け支え続け育て続けることの出来る身にならせていただく。これが私の“いのち”の意味と方向でありました。

“一輪の華をかざりて今日もまた浄土へ帰る旅を続けん”
山本仏骨和上のお歌であります。

今もそうですし、今までも、そしてこれからも阿弥陀さまやごお往生くだされた方々の願ひとその力に支え育て続けられながら自らの“いのち”の意味と方向を知らされつつ浄土に生まれるお念仏の日暮らしを送らせていただくのであります。なもあみだぶつ